

糟屋地区の仏像について(その1)

糟屋地域は北部九州に位置し、大陸文化が直接入る立地条件にあります。さらに、温暖な地域に自生するカヤ・スギ・ヒノキ・クスノキなど、彫刻に適した材料が手に入りやすかったという条件も重なり、造像環境は整っていたといえるでしょう。

(1) 若杉山と 周辺の仏像群

九州最古級(平安時代初頭)とされる木造千手観音立像(福岡県指定有形文化財)が、標高681mの若杉山に継承されています(現在新九州歴史資料館へ寄託中)。篠栗町にはこのほかに、平安時代から室町時代の仏像が、さまざまな地域に点在し、今日に受け継がれています。



九州最古級の木造千手観音立像(県指定有形文化財)

同山南面の須恵町佐谷地区に位置する建正寺は、中世以降天台宗が繁栄していた寺院であり、そこには平安時代後期の

伝教大師坐像(ヒノキ材の寄木造り・須恵町指定有形文化財)が安置されています。このほかにも須恵町立歴史民俗資料館には、天部形の木造仏の残欠があります。また、同地区の佐谷観音堂には、平安時代後期のヒノキ材で内刳りされた寄木造りの木造十一面観音菩薩立像(福岡県指定有形文化財)などもあり、また新原地区の新原地蔵堂にも如来像が安置されています。

この山は、最澄(伝教大師)や空海(弘法大師)が渡唐前後に修行した伝説が残る霊山で、現在でも宝満系山伏の嶺入りコースにもなっています。

このように、若杉山は霊山と呼ばれるにふさわしく、平安時代初頭から室町時代に造られた仏像が数多く残ります。

若杉山から西に位置する粕屋町にも平安時代前期に造像された木造虚空像菩薩坐像(粕屋町指定文化財)が、大隈区の真覚寺に伝わります。虚空とは広大な宇宙に似た無限の空間を意味し、この菩薩は「すべてを包み込み、衆生に知恵と慈悲を与えて救う」とされています。(次号へ続く)